

＜塩沢ゼミ紹介＞

1. 研究可能なテーマ

ゼミ全体としての共通テーマは「地域政治の実証研究」です。想定される研究テーマは、大別すると主として以下の通りになります。

- ① (個別具体的) 政治過程・政策過程に関すること。
- ② 有権者の政治意識や投票行動、または政治家などの政治行動に関すること。
- ③ 意見集約・政策決定のあり方など、政治的決定のしくみに関すること。
- ④ 地域政治を規定づける政治的構造に関すること。

担当教員自身は一貫して住民投票の実証研究に取り組んできたので、住民投票の分析に興味のある学生であれば特に、指導できることも多いです。ただ、広い意味での「地域に関わりのある政治的現象」を扱うのであれば、各自の興味・関心に沿ってさまざまなテーマ設定が考えられます。例えば、国政選挙における選挙区レベルの分析や各種地方選挙の分析、それらに付随する若者や女性の政治参画／地方議会に関する諸課題／政党間の勢力関係やその変化、政党内や政策決定に見られる中央地方関係、地域メディアと政治との関係性、住民参加をめぐる研究・・・など。これらはあくまで、ほんの一例です。

また、皆さんの中で私のことは「住民投票や選挙の人」というイメージも強いでしょうが、私自身の関心は、必ずしもそれだけではありません。特定の政策分野に関心のある人も歓迎します。ただ、「政策」を分析対象とする場合、政治学はどちらかというと、政策内容そのものについて論ずるよりも、「政策の成り立ち方」について分析することを得意としています(政策内容についての考察を軽視するという意味ではありません。)。つまり、「政策」を分析するなら、ある政策内容をめぐる合意形成・意思決定の過程や人々の意識、新たな政策の実施や政策変更がもたらす帰結などに着目することが多いです。

2. 研究方法

具体的な政治的現象について、因果関係を明らかにすることを目指します。そのための作業は、各自の興味のある事柄について、関連する文献や新聞記事などをあたって情報を収集し、それらを踏まえて仮説を考え、仮説を検証するためのデータや具体的な事実を整理し、分析し(必ずしも数値を用いた分析でなくても良い)、結論を導き出すという一連の過程からなります。基礎的な分析によって発見した新たな事実をもとに、さらなる仮説を提示し、より詳細な分析を積み重ねていく中で、最終的に何を、どこまで明らかにするのかを明確にしたうえで、卒業論文の執筆に取り組んでもらいます。

ゼミで重視するのは、単に「正解」を探すことではなく、分析や結論に至るまでのプロセスです。さまざまな政治的課題を解決するうえで、多くの場合「唯一絶対の正解」は存在しません。住民の多数意思が示されても、それが社会全体にとって最も望ましい結果を常にもたらすという保証もありません。だからこそ、いかに適切な方法によって分析を行い、どのようなプロセスを経て結論に至ったかが重要になります。社会の中でどのような職に就く場合でも、自らの考え方や主張を相手に伝える時には、主張の根拠や論理的構成が明瞭であるほど、より説得力を持ちます。こうしたスキルを身に付けるために、最大限の努力をしてください。

3. ゼミの進め方

【3年前期】

久米郁男著『原因を推論する[新版]：政治分析方法論のすゝめ 量的方法と質的方法』(有斐閣／2025, 定価2,100円+税)を各自で購入してもらい、これを主として参考にしながら、実証政治分析の基本的な発想を習得する。

それと並行して、各自が興味のある事柄について基本的な情報を整理し、隨時発表し、それをもとに議論する。

この段階で、各自の研究テーマが確定している必要はありませんが、他のゼミ生の発表に対しても積極的に発言することを求めます。

【3年後期】

夏休み中にも適宜、情報収集や文献講読に取り組み、その成果も踏まえて、具体的な研究テーマについて検討する。研究テーマが決まったら、仮説を考え、必要に応じて調査を実施し、収集した情報やデータの許す範囲で何を、どこまで明らかにできるかを検討しつつ、リサーチペーパーを各自作成し、学期末に提出する。

リサーチペーパーは、卒業論文の第1章に相当するもの、もしくは分析部分を中心とした「プレ卒論」のようなものを想定して作成してもらいます。つまり、卒業論文の土台作りとして考えるので、4年次において本格的な肉付けをして完成させることができれば理想的ですが、明らかに意欲が感じられず必要最低限の水準を満たし

ていないと担当教員が判断した場合、または自分自身でどうしても納得がいかないという場合には、一から卒業論文を作成してもらいます。

【4年】

卒業論文の執筆。開講形態は例年、3年4年の合同ゼミとしています。そのほか必要に応じて、各自の試験・就職活動の状況等も考慮しながら随時、個別に指導を行います。

4. 留意事項

ゼミで各自が取り組むテーマは、それぞれ自律的に探究することが前提ですから、各自の興味・関心なしに、教員の側から具体的な課題を与えることは、基本的にしません。逆に言えば、自発的に課題を設定し、情報やデータの収集、調査・分析などを進めていくことができれば、ゼミでの取り組みは楽しさを増すはずです。そういう意味では、意欲さえあれば、各自の進め方に関する自由度は高いゼミと言えると思います。ゼミ生の発表に対しては、当然ながら教員からもその都度コメントを与えますが、それを受け「具体的にどうしたいかは、自分で考える」ことができるようになれば理想的です。

また、ゼミでは政治に関する「時事ネタ」をもとに議論する機会もしばしばあります。特に堅苦しい感じではなく、ざくばらんに話し合う雰囲気ではありますが、「いま政治の世界で何が起きているか」を知らないままでいると、そのうち先輩たちの話についていけなくなります。そんなに難しく考えなくてもいいので、TVのニュースや新聞記事などを通して、政治や社会の現状に触れる機会を積極的に作ってください。

3年前期には、ゼミ生は「地域参画論」を受講すること。2年前期「現代日本の政治過程」、2年後期「地域政治学」、全学共通科目「政治学（塩沢担当）」のうち、少なくとも2科目以上を受講中もしくは単位取得済みであることが望ましい。

5. その他ゼミでの取り組みについて

学生時代の指導教授を共にする政治学教員のゼミ同士が集まる「合同ゼミ合宿」に、2018年度から当ゼミも参加しています。2026年度は、金沢市内での開催を予定しています（参加大学は、中央大学・立命館大学・北陸学院大学・鳥取大学・関西外国語大学・大東文化大学の6大学の予定）。

また、近年は選挙のたびに必ず、鳥大のキャンパス内にも期日前投票所が設置されていますが、その際の投票立会人を毎回、ゼミ生に担当してもらっています。興味のある人は、ゼミ面談の際に尋ねてください。

このほか、3年前期で方法論を学ぶ際には、ゼミ生の興味・関心や理解度に応じて、以下の文献を追加的・補足的に用いることもあります。（購入してもらう必要はありません。）

松林哲也（2021）『政治学と因果推論』岩波書店

伊藤修一郎（2022）『政策リサーチ入門[増補版]』東京大学出版会

伊藤光利・田中愛治・真渕勝（2000）『政治過程論』有斐閣アルマ

加藤淳子・境家史郎・山本健太郎（2014）『政治学の方法』有斐閣アルマ

建林正彦・曾我謙悟・待鳥聰史（2008）『比較政治制度論』有斐閣アルマ

浅野正彦・矢内勇生（2013）『Stataによる計量政治学』オーム社